

北海道の農業を応援するため ラジオから「現場の声」を発信

作家・エッセイスト 森 久美子さん（札幌市）

令和5年2月から札幌市豊平区
のコミュニティ放送局・FMアツ
ブルで「農業と食がつむぐ未来」と
いうラジオ番組を開始されました。
きっかけをお聞かせください。



放送中の森久美子さん。平成7年に朝日新聞北海道支社主催の「らいらっく文学賞」に入賞後、作家デビュー。農業や食について多くの作品を執筆し、農林水産省や北海道、JAなどの委員も多数務める。主な著書は「ハッカの薫る丘で」（中公文庫）、「優しいおうち」（中央公論新社）など



令和5年3月15日のゲスト、山田農園代表・山田誉さん（長沼町）と、農事組合法人Jリード代表・井下英透さん（豊頃町）と

森 昨年から、農業施策の変化や国際関係の急激な変化などにより、農業資材、飼料などのコストの増大による農業経営の窮状、酪農の経営の大変さを農家の皆さんから直接伺う機会が多く、胸が苦しくなりました。離農が相次ぐ現状の中、農業が再生可能な経営を続けられるよう応援することは、「食べる（買う）側＝消費者」に食料の安定供給を実現してもらうために重要です。そこで、私が個人で放送枠を確保して、この番組をスタートしました。

決定したのが年度末に近い1月だったこともあり、スポンサーを探してから始めるところが遅れると思いつき、取り急ぎ自費で放送料を払ってこの番組をスタートしました。

私たち消費者の生活も物価の高騰で非常に苦しい状況です。しかし、仮に少し値段が高くとも、国内で生産された農産物を食べて農業を守つ

森 昨年から、農業施策の変化や国際関係の急激な変化などにより、農業資材、飼料などのコストの増大による農業経営の窮状、酪農の経営の大変さを農家の皆さんから直接伺う機会が多く、胸が苦しくなりました。離農が相次ぐ現状の中、農業が再生可能な経営を続けられるよう応援することは、「食べる（買う）側＝消費者」に食料の安定供給を実現してもらうために重要です。そこで、私が個人で放送枠を確保して、この番組をスタートしました。

私たち消費者の生活も物価の高騰で非常に苦しい状況です。しかし、仮に少し値段が高くとも、国内で生産された農産物を食べて農業を守つ

ていかなければ、日本の食料が足りなくなる事態が起ころる可能性があります。今こそ「北海道の農業を応援しなければ」という待ったなしの気持ちでした。

— 平成11年から約12年、同じFMアップルの番組でパーソナリティをなさいましたね。

森 12年間でおよそ600回、「北

の食物研究所」という番組を放送し、スタッフとの信頼関係があつたので、迷わずこの局での放送を決めました。「北の食物研究所」でも毎週いろいろな専門家をゲストに招き、食と農業、健康をテーマに対談しました。ゲストの皆さんから本当に多くのことを学び、ここで蓄積した基礎がなければ、的確な質問をしたり、重要な話題を引き出したりするのは難しいと思います。また、放送を通じて幅広い人脈ができました。今回新しい番組を始めたに当たって、私の一番の財産はこれまで築いてきた人脈だと改めて感じました。

— 28年前に北海道の開拓農家を題材にした小説で文学賞を受賞し、以来作家として活動される中で、「農業と食」は重要なテーマとなっていますが、そもそも森さんが農業に関心を持たれたのはなぜですか。

森 私は農家出身ではありません

■「農業と食がつむぐ未来」
FMアップル(76.5MHz) 毎週水曜日15:30~16:00
ホームページ <http://765fm.com/>
・放送はYouTubeのライブ配信、サイマルラジオ、ListenRadioで全国どこからでも聞くことができます。
・過去の放送は、「農業と食がつむぐ未来」専用ホームページ(<https://kumiko.usagi.co/>)からも聞けます。

■森 久美子さん
ホームページ <http://kumiko.sapporocity.info/>
Facebook <https://www.facebook.com/kumiko.mori2>



令和4年12月10日、美唄市開催の「2022グリーン・ルネサンスシンポジウム」での講演。テーマは「『食』と『農』を結ぶ～心を育む食農教育」



令和4年10月1日、「農業・農村ふれあいフェスタin赤レンガ」で総合司会を務め、北海道の農畜産をPR



『日本農業新聞』連載時から大きな反響を呼んだ「青い雪」が、大幅加筆によりついに文庫化!
1964年の東京オリンピックに未来を夢見ついた北の大地で学んだ中学生たち。50年ぶりの同窓会から、再び人生が動き始める
中公文庫 ●定価 本体680円(税別)

日本農業新聞の好評連載「青い雪」を文庫化した著書「ハッカの薫る丘で」



令和4年7月、出身校である北海学園大学で特別講義をする森さん



令和4年5月、拓殖大学北海道短期大学で客員教授として講義をする森さん

が、農家の親戚が多くいて、子どもの頃、夏休みに親戚の家へ遊びに行つた時、大叔父が「ごちそうに」と鶏を絞めて食べさせてくれたことが原点になっています。町中で育った私は鶏をさばくシーンに衝撃を受け、硬直して泣きながら「もう鶏は食べられない」と思いました。でも、それがおいしそうな料理になって食卓に上り、皆が食べられる姿に誘われて自然と箸が伸びました。口に入れたお肉がスープと喉を通つてお腹に入つた時、自分が「命をもらつて生きている」と実感しました。食べ物がどうやって作られ、私たちに届くのか、それがどんなに大事なことか、身をもつて感じた瞬間でした。自身は食べ物を生産することはできません。でも、「つくる人を応援すること」はできます。

— 令和2年度から北海道大学公共政策大学院に通い、修士号を取得されました。農業ではなく、公共政策を勉強されたのはどうしてですか。

森 平成22年から10年間、農林水産省の食料・農業・農村政策審議会委員を務め、審議会の前に送られる分厚い資料を読み、いろいろな人に会い、自分の意見をどうやって発信していくべきよいか考え続けてきました。そうして知識や経験を蓄積していくうちに、農業だけではなく、他の産業や地域全体を俯瞰できる視点を持ちたいと思ったのです。

森 番組を応援してくれる人がどんどん増え、今後は支援をいただける場合もあるかもしれません。スタートの気持ちを忘れずに頑張ります。ゲストへの依頼も着々と進めており、まずは来年3月まで続ける予定です。毎回素晴らしいゲストとのトークで、とても楽しくなる内容です。ぜひお聞きください。

(フリーライター/石田美恵)